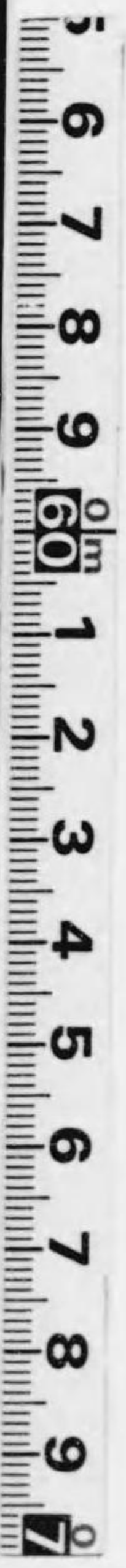


337
1716



始



207
146

神代乃
あまの
つ

317-146

明治天皇御製



皇太后御歌

のち神皇正統記の御歌
みまはるる御歌の御歌

天皇の御歌
神皇正統記の御歌



大正
2. 12. 3
内交

この神代圖畫は、己れ明治の始め、教部省より教導職に補され、
布教巡回せし時、有志者より神代の物語せよと、請はれしに依
り、何人にも容易く意得せらるゝやうにこの、心しらひより、古
事記、日本紀の、要所につき、ものせしものなるを、今回この地の
篤志家、富田青山兩氏の需に依り、每圖の寫眞に説明を附しそ
の帖の名を、神代の面影と稱するにつき

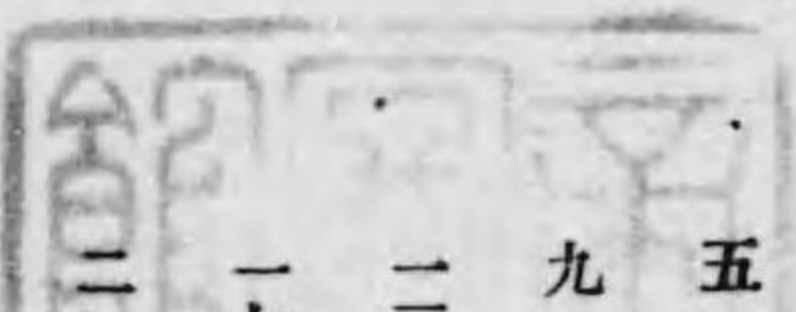
神代の面影をさへうつし繪の

ふみ見てさされ國のすかたを

斯くしるすは大正二年十月神嘗祭の日

名古屋市寓居にて

塚田 菅彦



目

次

四一	三三	二九	二五	二二	一七	一三	九	五	一	造	化	三	神
鞠	出	酒	大	似	樹	班	黃	大	造	化	三	神	
羽	雲	杯	國	猪	種	駒	泉	八	洲				
管	大	指	主	大	播	投	平	坂	國				
草	社	舉	神	石	殖	納	坂	國					
四二	三八	三四	三〇	二六	二二	一八	一四	一〇	六	二	天	之	瓊
欄	海	尋	返	坂	令	八	農	櫛	貴	天	之	瓊	矛
原	幸	矛	矢	河	寢	岐	業	原	子	誕			
之	山	讓	可	追	蛇	大	養	祓	誕	生			
宮	幸	與	畏	撥	室	蛇	蠶	除					
三九	三五	三一	二七	二三	一九	一五	一一	七	三	一	一	一	一
海	天	衆	少	鳴	吾	天	登	一	一	一	一	一	一
神	孫	島	彥	銅	心	岩	天	片	一	一	一	一	一
之	降	任	名	射	清	窟	報	之	一	一	一	一	一
宮	臨	事	命	入	清	隱	命	火	一	一	一	一	一
四〇	三六	三二	二八	二四	二〇	一六	一二	八	四	二	二	二	二
鱈	海	中	幸	喚	因	青	劍	背	二	二	二	二	二
魚	鼠	國	魂	入	幡	草	玉	揮	二	二	二	二	二
奉	拆	平	奇	大	素	笠	誓	以	二	二	二	二	二
送	口	定	魂	室	兔	裝	約	逃	二	二	二	二	二



一 造化三神

此の處にうすく見えます御三方は、造化三神と申しまして、真中におはしますのが、天之御中主神で、この神は天地の未だできないさきに、大空の真中に、主と御なりになつた、一ばん始めの神であります、右に坐すのは、高御産巢日神、左に坐すのは、神産巢日神であります、此御二方が、天之御中主神の御徳に次で、尊い神で、有と有ゆる物をむすび成す、御徳の有らせらるる方であります、故に本居宣長先生の歌に

諸の成出るもとは、神産靈
高皇産靈の、神の結びり
とよまれたので有り坐す

二 天之瓊矛

此の處は、伊弉諾尊伊弉册尊に、天津神より天之瓊矛を賜はるところで、其わけは未だ海が出来たばかりで、浮膏の如く國が漂ふて居りますから、夫をよくく修理固成るやうに、この思召でこの矛を下されたので有ります、古き歌に「海原やなみに、漂ふ、芦牙の、かひある國と、なれるかしこさ」とござります、この此の時を想像てよまれたので有ります



三 磯取盧島

此の處は、伊弉諾尊伊弉册尊が、天之浮橋と申して、雲に乗つて、天津神より賜つた天の瓊矛で、大海を畫廻して引上げ成ると、其の矛のさきより垂れました鹽が、自ら凝り固つて一つの島と成りました、夫が磯取盧島であります、是は自づとこれる島と云ふわけで、名づけられたので有ります、其島は淡路の沖にあります、仁徳天皇の御製に、「わし照るや、難波の崎ゆ、出立ちて、我國見れば、粟島おのころ島、檳榔の島も見ゆさけつ島見ゆ」といひあります

四 二神遭合

そこで伊弉諾伊弉册尊が、其の磯取盧島に、御降りになつて、天之御柱を御立てになり、八尋殿と申して、御住居になる御殿を御造りになり、其柱を廻つて夫婦の交接を御始めになつたので有ります、此の處に鳥が居りますのは、にはくなふりと申して今云ふ鶴鶴のことで有りますが、是は天津神より遭合の道を傳へる爲に遣されたので有ります



五 大八洲國

是は伊弉諾伊弉册尊が御造りに成た大八洲國
 で即ち淡路島、四國、九州、隱岐、壹岐、對
 馬、佐渡、本州、のこの八つが始めて出來まし
 て夫より吉備兒島、小豆島、大嶋、女島、知
 訶島、兩兒島など云ふ六島ができました、故
 に本居宣長先生の歌に「天の下、國は多げど
 、神漏岐の生みなしませる、大八洲國」とご
 ざります

六 貴子誕生

伊弉諾伊弉册尊には、既に大八洲國を御造り
 になり、國魂神を始め諸神を御生みに成たる
 上は、天下の主たるべき者を生ねば成らぬと
 有まして、第一に天照皇大神、第二に月讀
 命、第三に素盞鳴男命、此の御三方を御生み
 になりまして大さう御喜びに成りました是迄
 澤山の子を生んだが、かやうな貴い子がない
 と、御頭玉を取つて、夫々御授けに成る所で
 有ります

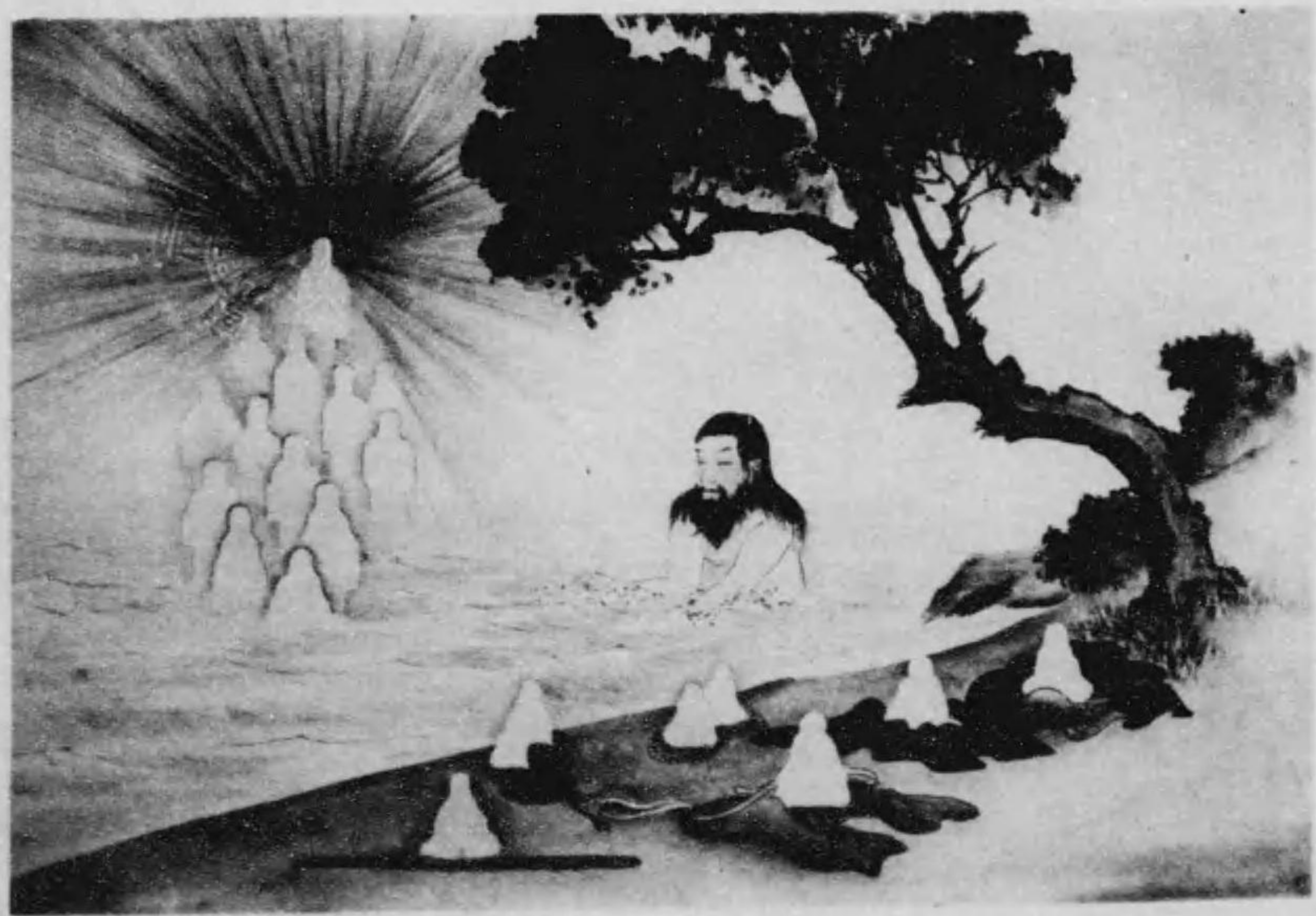


七 一片之火

此の處は、伊弉册尊が、火神を御生みに成た爲に、夜見國に御隠れに成つたのを、伊弉諾尊が御慕ひに成て、其夜見國に御出になり、暗い所ゆゑ、櫛の齒を一本缺き、火をこもして、御覧になる所で、すると伊弉册尊の、御體より膿汁が流れ出、蛆虫が集て、側には八雷が居りまして、今でも飛んで懸らうと云ふ、恐しい有状であります

八 背揮以逃

是は大變だと、伊弉諾尊逃返り成ると、伊弉册尊は、自分を辱められたと云ふので、御腹立ちになり、黄泉津醜女を追手に遣され坐せ、伊弉諾尊が逃乍ら、髪筋とする黒髪を取て御投に成と、夫が葡萄の實と成ましたから、醜女は、夫を取て喰居間に、御逃に成坐と、又追付かれ坐たから、今度は御挿に成て居る櫛を缺て御投になると、夫が笥に成坐た、醜女は夫を抜て喰居坐から、其間に御逃に成ると、今度は見るも恐ろしき雷どもが、大勢追駈て參り坐た故是は大變なりと、劍を抜て後手に振乍ら、黄泉津平坂にお出に成と、其所に桃が有坐たから、其實を取て御投に成と、皆逃て返り坐した、そこで桃は苦い時を助くるものじやと云ので、大加牟津實命と名を賜つたので有ります



九 黄泉平坂

最後に、伊弉册尊御自身で追覓て、黄泉平坂に御出になると、伊弉諾尊は、大磐石を平坂の真中に御置きに成つて、今よりは夫婦の縁を切ると仰せらるゝと、册尊は大そう御恨みに成て、あなたが斯く造るならば、あなたの國人を、一日に千人宛縊り殺しませうと有坐すと、諾尊は左様成るならば、此方は一日に、千五百人宛の産屋を立てませうと、云れ坐た、夫より人民を天の益人と申し坐て、死ぬる者より生るゝ者の多きわけになりました

一〇 榎原祓除

伊弉諾尊、我は穢き黄泉國に往た事である、是より身潔して身を清めむと有坐て、筑紫日向の橋小門の榎原に御出に成て、御身に着て有ます物を御捨に成と、夫々神が御できに成り、夫より上津瀬は潮速し、下津瀬は潮弱しと、有て中津瀬に、は入て御漉ぎになると、數多の神々が御現れに成て、身潔の行を御助けに成りました



一一 登天報命

伊弉册尊天津神より仰せられました、國土經營の重任を首尾克果されましたにより、天上高天原に上つて、天津神に復命なされて、日の若宮に御留りなされるのであります

一二 劍玉誓約

素戔鳴尊、天上なる天照大御神の御許に、御昇りになると、山河悉く響み、國土皆動ぐ、と有坐て、中々の勢ひなれば、大御神には是は常事であるまいと、思召て忽ち武裝して、御待ちに成て居ると、素戔鳴尊御出に成り、吾は決して惡意なし、父尊より根國に往けと仰せられしに付、遠請ひの爲來れるなり、と申され坐と大御神は、其赤心を如何にして知らるか、と仰せられしに、素戔鳴尊各誓ひして子を生まん、若吾が生る子の女ならんには、惡心有と思召せ、若又男ならんには、惡心なきを信せられよ、と申し給ふ、そこで天の安河を中に置いて、互に劍と玉とを取換して御吹に成ると、三方の女神と五方の男神が御生れに成坐した、そこで大御神、此五男は吾物によりて生れたれば吾子なり、三女は其方の物に依て生れたれば、其方の子なりと仰せられました



一三 斑駒投納

そこで紫菱鳴尊が、天照大御神に申し上げらるゝには、吾心赤か故に男子が出来たのである、さすれば自ら巳が勝である云ふて、勝ほこりに御荒備成れて、大御神の服屋の屋根から、斑駒の皮を剥で夫を投納したので、服織女驚て機梭で前を衝て死んだと有ます

一四 農業養蠶

素菱鳴尊食物を大氣津姫神に請ひ坐と、鼻口又尻から種々の食物を出して御上になると、穢い物己れに與へた逆、御立腹の餘り御殺しに成と、天照大御神御聞に成て、使者を遣され御見せになると、殺された屍の頂に牛馬、額に粟、眉、眼、に稗、腹より下には稻麥大豆小豆が生じて居り坐たから、夫を悉く取て献りしに、大御神大喜びに成て、此等は人民の食ひて活べきものなりと、仰せられて其種を田畑に植られ、又爾は口に含まれて、糸を抽出されました



一五 天岩窟隠
 素戔鳴尊の荒備に堪へぬ故、天照大神は是を避んと、天の岩窟に入り戸を閉て、御隠りに成坐たから、世は常暗と成坐て萬の災が起り大騒ぎと成り坐た、そこで八百萬神等が會議を開き、百方相談の結果、御祭りして祈るがよからうと、先づ鶏を集めて時を作らせ、底燎を焚て事を辨じ、神に玉や鏡を掛け弊帛を結び垂て太玉命是を捧げ、兒屋命は祝詞を申し、大力無双の手力男神は、岩窟の側に隠れ居り、細女命は舞をまふ、八百萬神囁す笑ふ爲に高天原震動し坐たから、大御神も不思議に思召て、岩戸を細目に明て御覽なさうと爲られた、其利那隠れ立たる、手力男神其手を取て引出し、太玉命が繩を其後に延且して、是より内に御入り成る勿と申し、是が標繩の起りである、そこで天地本通りに明るく成つたと有ます

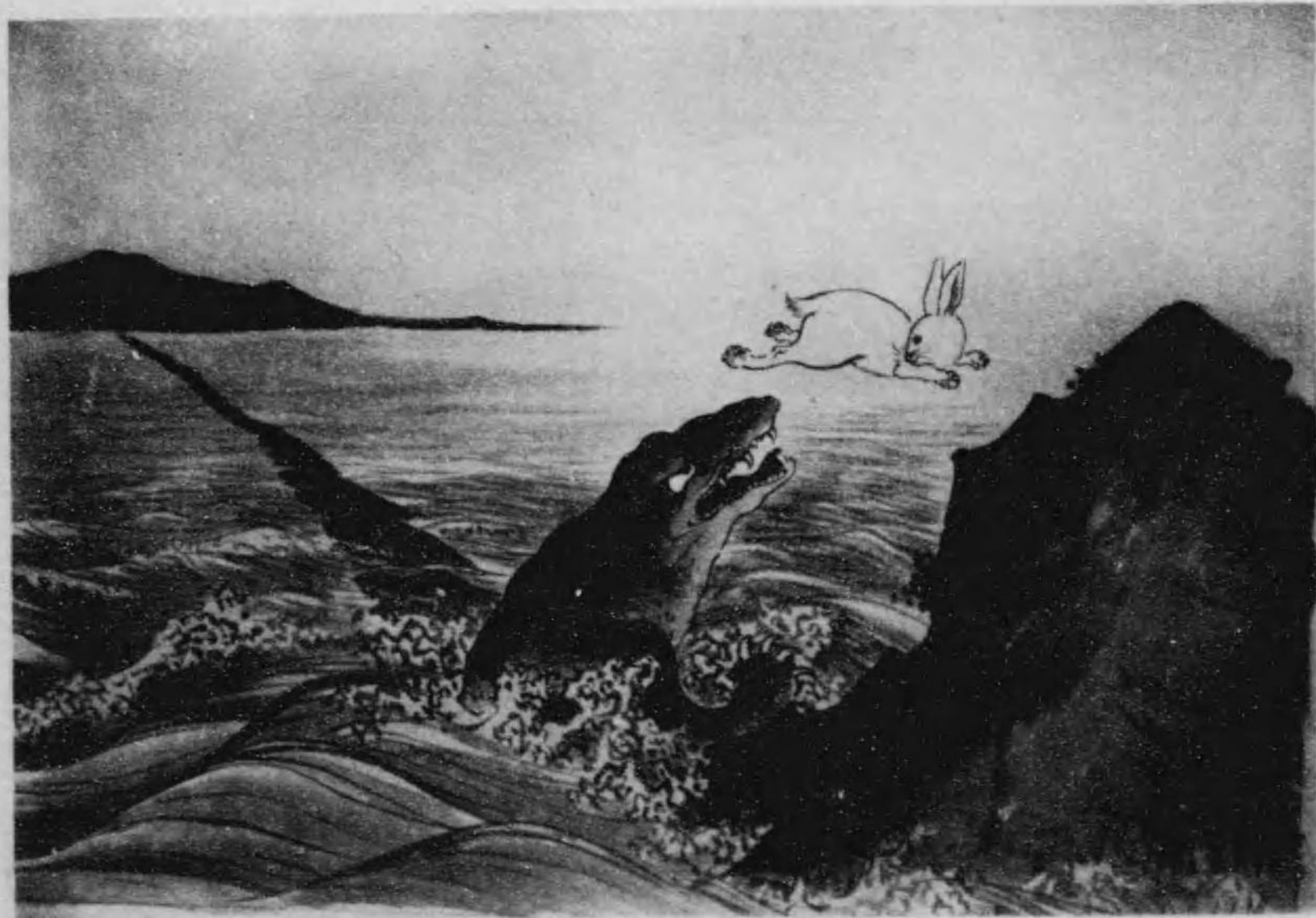
一六 青草笠装
 岩窟戸の大騒動も、其起りは素戔鳴尊の荒備に起つたので有坐から、八百萬神の會議に於て、素戔鳴尊に祓除を科せて、鬚を切り手足の爪を抜かして放逐されました、そこで天上より御降りの時、霖雨で有ましたから青草を結んで、笠笠とし艱難なさる、所て有ます



一七 樹種播殖
 素戔鳴尊先づ朝鮮に御降りになしまして、天上より御持ちに成つた所の、樹種を御頒ちになり、其樹種は内地へも御持ちに成つて、九州を始め、紀伊國から普く御殖に成つた所が、皆青山と成つたと有ります



一八 八岐大蛇
 素戔鳴尊出雲國、肥の川上に御出になると、其所に老人夫婦が處女を中に居て泣くを御覽に爲て、其方の名は何と稱ふ、何故に泣くかと、御問になると、老人夫婦は、足名椎、手名椎、娘は奇稻田媛と申します、先に八人の娘有りましたが、毎年八岐大蛇に吞れまして、今亦來る時分で御座ります故、泣くぞ申し坐と、尊仰せらるゝには、吾は天照大神の弟である、其娘を吾に上れ、其大蛇は己が退治してやると、仰せられて、八幡酒を八箇槽に盛り、八の假肢に置しめて御待になると、頓て其大蛇出て来て、其酒槽に頭を垂て呑み、酔が廻つて寝たる所を、尊は劍を抜で、すだすだに御切りに成と、中尾に至りて劍の刃が毀れた故、御覽なると一本の劍が有りました、是が叢雲劍で後に草薙劍と稱して、熱田神宮の御神体で御座坐す



一九 吾心清清

素戔鳴尊奇稻田媛を妃と成され、共に棲む宮を作らん、出雲國須賀と云ふ所に御出に成て、吾心清清しく成つたと、仰せられて御殿を作られました、因て其地を須賀と稱へます、其時雲の立昇れるを御覽有つて
八雲立、出雲八重垣、妻ごみに
八重垣つくる、其八重垣を
と御詠になりました即ち三十一文字の歌の始りて有ます

二〇 因幡素兔

因幡の白兔が隠岐の島に在りし時、因幡に渡らうとしたけれ共、其方法がないのに困つて、海の鰐を騙して云ふには、吾と貴様の方とはどちらが、仲間が多いだらう、此島から氣多の前まで並んで見よ、吾其上を渡つて數へて見るからと云ふに付、鰐が其云ふ通り並ぶと、其上を渡つて氣多に着たと思ふた時に、鰐の間拔め此吾に騙されやがつたなど云ひますと、はづれに居た鰐が怒つて、兔の毛を皆剃で、赤はだかにしました、夫を大己貴命が御覽に成つて、本の通りに御癒に成つたのである



二 似猪大石

大己貴命に、庶兄弟が八十神と申して、澤山有りましたが、其方々が、兎角大己貴命を御悪みに成て様々難題を申されましたが、此處は伯伎國の手間山本に於て、赤猪を待捕れ連上から赤猪に似たる焼石を轉し落されました、すると其石に焼付れて身を傷はれましたが、母君より神皇産靈神に、其平癒を懇請された處、蜚貝媛と蛤貝媛とを、御降しに成つて治療を施され坐たれば、其効驗忽ちに顯れて、大己貴命は、元の様な丈夫となられました、其御艱難は斯やうの譯であります

三 令寝蛇室

大己貴命の御艱難を、母君が御聞になり、此所に於ては不安心と思召て、素戔鳴尊の居る根國に御遣しに成坐た、すると素戔鳴尊は、蛇の室屋や、蜈蚣や蜂の室屋へ入れて、寝かし成れ坐て、又大己貴命御艱難成るのであります



三三 鳴鏑射入

素戔鳴尊は、ご逆も御難題を仰せらるるので、今度は鏑矢を廣い廣い野原へ射て、其矢を取に遣り、其所へ火を付て焼殺さうと成れたので有から、今度こそは死なねば成ぬと、明めて居られ坐と其所へ、ちよろちよろと鼠が這出で内はほらほら外はすすぶと、鳴て教へて呉ましたから、其穴に御還入になると、其間に火は焼過ました、矢は鼠の子が咋へて來ました

三四 喚入大室

今度は素戔鳴尊の御部屋に喚込んで、頭の虱を取れと仰せられましたから、能く見ると蜈蚣が一杯に集つて居る、其時御女の須勢理媛命が、棕の實と赤土とを、御授けに成坐たら、其實を噛み赤土を含んで、唾吐きしかば、素戔鳴尊は眞に蜈蚣を噛み殺した事と思はれ其勇氣に感じて、其夜は御寢になりました



二五 大國主神

そこで、大己貴命は妃の須勢理媛命を負て、弓矢太刀琴など御持に成て、素戔鳴尊御寝の間に、遠く御逃に成た所が、素戔鳴尊御目が覺て、後より追駈て黄泉平坂に至り、大音聲で仰せらるゝには、其方の持て居る弓矢太刀で、庶兄弟を征伐して、大國主神と成り、國玉神と成り、我女を正妻として、宇賀山の麓に大きな御殿を造て、其所に住居せよと斯う御座ました

二六 坂河追撥

大己貴命は、素戔鳴尊の仰せの通り太刀弓矢を以て庶兄弟を坂の御尾毎に追ひ伏せ河の瀬毎に追撥つて國造りを御始めに成るので有ます本居宜長先生の歌に
大穴牟遲、生太刀弓矢、得まして乎
大國主の神とならし、
と有ます

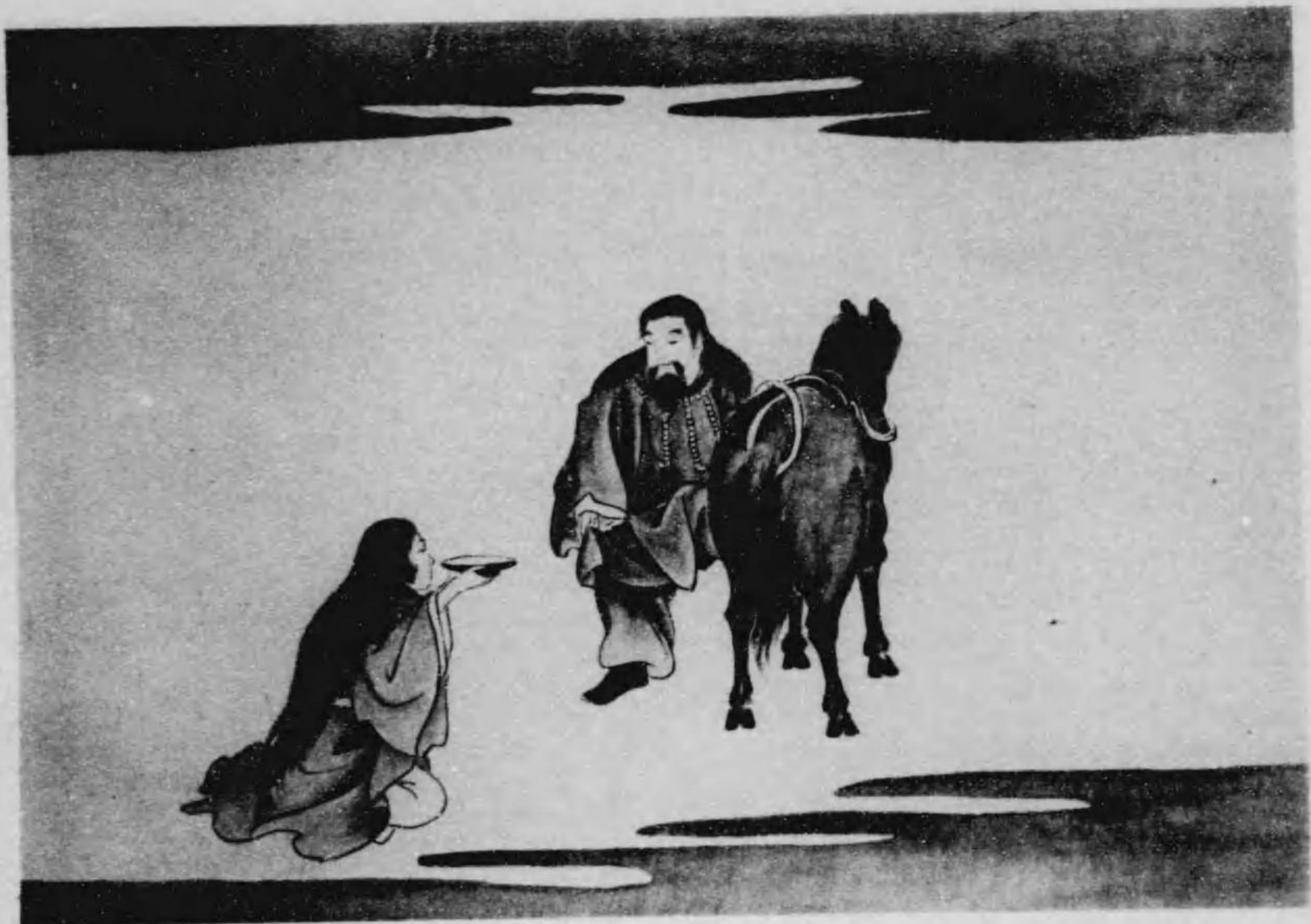


二七 少彦名命

大國主命出雲の三保崎に居られ坐と、遙か沖の方より天羅摩船に乗り、鶴鷲羽を衣物とし、此方に奇來る神が有りましたが、御名が分らぬ、問へ共答へず、又誰に尋ても知らず、其時蟾蜍が傍に有て云ふには、久延彦に聞かれたらば分りませうと、そこで其神を呼で尋ね坐と、是は神皇產靈神の子少彦名神で有と、答へたるに付其事を神皇產靈神の御許に申し上坐と、我子であるから大國主神と兄弟と成て、國を造り堅めよと有りました

二八 幸魂奇魂

少彦名神、常世國に御渡りの後、大國主神俄に心細く成り、吾獨りで何んで此國を作ること出来やうか、誰か協力するものなきかと、歎息せられた、其時怪き光を放て、海を渡つて來る神が有から、誰じやと御問ひに成と、我は其方の幸魂奇魂である、我を祭らば共に國を造らむと仰せられた所有ります、官幣大社大和の大神神社は、此神を祭つたので有ります



二九 酒杯指舉

此處は、大國主神が出雲國より倭國に上らむ
 と、馬に御乗りになる時、大后須勢理姫命よ
 り、御饒別の盃を献上になり坐所で、其時大
 后か御歌にて仰せらるゝには、私は女で御座
 りますから、あなたの外に夫は有ません、あ
 なたは男で有坐すから、御出の先々で妻を御
 持に成ませ、と云ふて慰められたので有ます

三〇 返矢可畏

是は天若彦が、天罰を受坐た所で有ます、其
 譯は天上より此國を平げんと、天若彦と云神
 を御下しに成坐た所が、八年も立に返事を申
 した上故、雉を見に遣され坐と、天若彦が兼
 て天津神より賜つた、弓矢を以て其雉を射坐
 た所が、其矢天津神の御許に到り坐たのに、
 血が着て居坐たから、天津神思召すのには、
 是は先に天若彦に遣した矢である、若し悪心
 で射たのならば、此矢に當れと仰せられて、
 天上より御投に成と、天若彦が胸に當て死に
 坐た、之より世に返し矢を忌として有ます



三 衆鳥任事
 是は天若彦が、葬式のところ有ます、天罰
 を受ました、天若彦の事有ますから、葬式
 の役員には、神を使はずに鳥を使はれたので
 、即ち川鴈、鶯、翠鳥、雀、雉、鴉、鳥の
 類を集めて、夫々使彼された有ます

三 中國平定
 此處は、經津主神と武甕雷神が、出雲國の伊
 那佐の小濱に御降に成て、劍を引抜き浪上に
 逆を立て、其上に跌坐して大國主神に、尋ねら
 るゝには、天津神の仰は、天津神の御子を此
 國に下して、大君と成るのであるが、領土は
 悉皆譲らるゝか如何にと、有坐して大國主神是
 は中々重大の事柄有ますから、子等にも篤
 と相談の上、御挨拶申上りと答へて、御子事
 代主神に相談有しに、異儀なく畏りたるに健
 御名方神は領土献上を憤慨に思ひ抵抗せしも
 二神に迫れて信濃の諏訪に至り力及はず降參
 し遂に此國を天津神の御子に御上げに成たの
 有ます

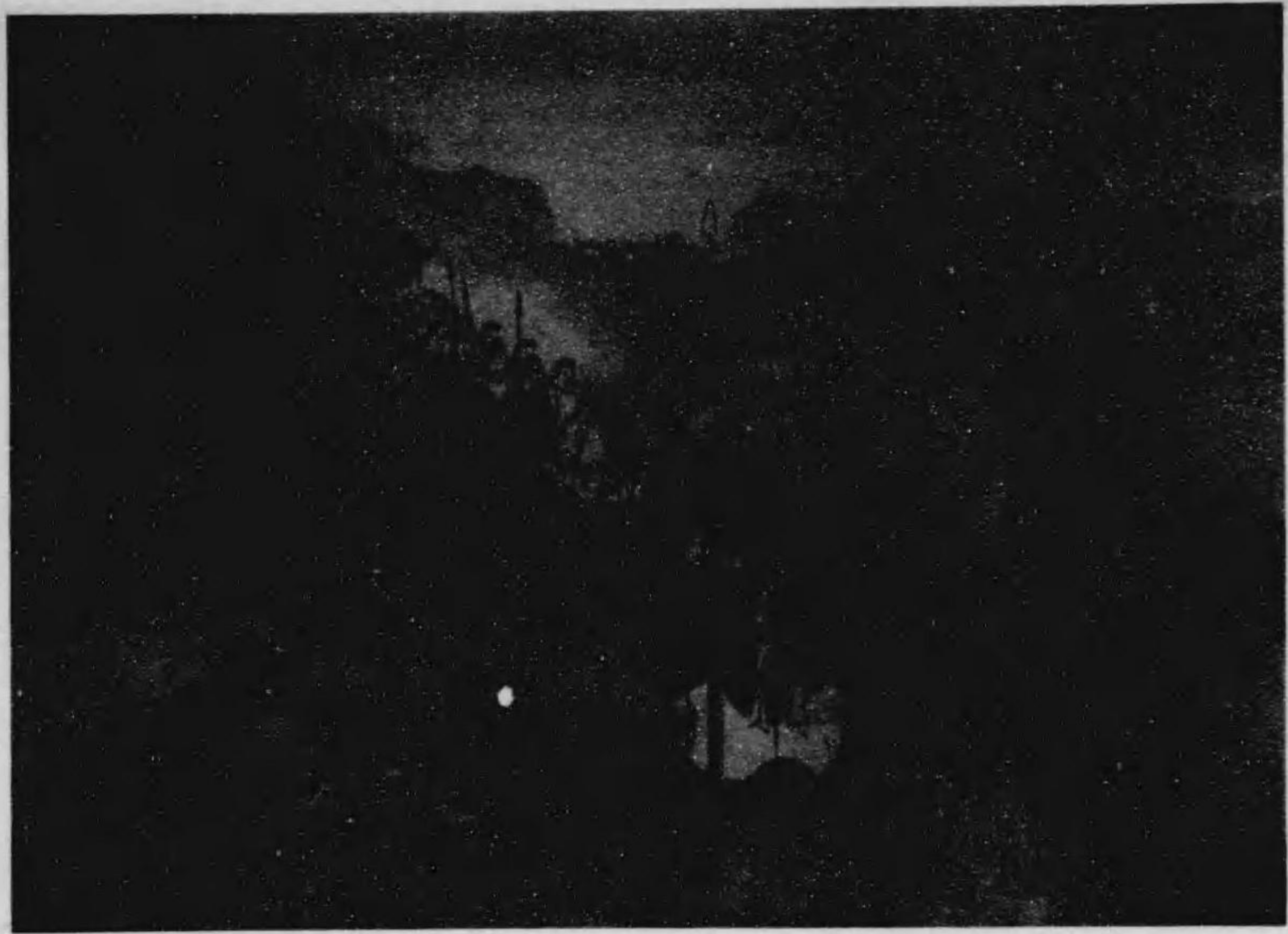


三三 出雲大社

大國主神此國土を天津神の御子に献上し、我宮は天神の御子の宮の様に大きな御殿造營あらば吾は此世の事を一切打棄て隠居せん又我數多の子も天津神の御子に末長く仕奉りて忠勤を勵まんご有しに付其望み通りの大社を立て天穂日命を其神宮と成れたのである是が男爵千家宮司の先祖であります

三四 尋矛讓與

大國主神既に御殿も出来、御隠居成るに付ては、是迄身を離さず大切に成れた八尋矛を、經津主神、武甕槌神、に譲りて申さるゝには、我此矛を以て國を平げたので有ゆる、天津神の御子も、此矛を御用ゐらば、國土自然と平かんと斯様に申されたのであります



三五

天孫降臨

葦原中國が、悉く平定したによつて、天照大御神の御孫、天津彦火瓊杵尊に、八坂瓊曲玉、八咫鏡、瓊雲劍の三種神器を、天日嗣の御孫として御授に相成、數多の神々を副て、御降しに成り、前に御出に成るのが、天宇受女命、其前に立て居るゝのが、猿田彦命で、此方は道案内を成るので有ます、其案内で筑紫の日向高千穂穗觸峰に御降になり、笠紗の御崎に到りて御殿を建て其所に御住に成ました

三六

海鼠口拆

天宇受女命が、猿田彦神を送つて伊勢に到り、大小の魚を呼集め、其方共天津神の御子に、御仕へ申すかと、御問に成たれば、皆一同に畏り坐たと答たに、海鼠は何の返答も致ぬに付、此口物云ぬ口と云ひて、紐刀にて其口を割れた故、海鼠の口は、之より割たので有と傳へて居ります



三七 一夜妊娠

此處は、木花開耶姫命が火の中で、御子を御産に成たので有ます、其わけは邇々杵命が、一夜御召に成しばかりに、御妊娠成れた故、御疑ひがかかり坐た、そこで木花開耶姫命仰せらるゝには、若し國津神の子で有ならば、無事には生れませんと云ふて、戸無き御殿を造て、其内に入り出産の時、火をかけられましたに、無事に火照命火須勢理命火々出見命の御三方が御生れに成たので有ます

三八 海幸山幸

是は兄尊火照尊の漁獵と、弟尊火々出見命の山獵と、互に交換成ると、弟尊は兄尊の釣鉤を失ひ成れたに付、其代を澤山拵へて、御返し成れたれども、兄尊承知成らず、是非元の鉤を返せと有に、火々出見命殆んど閉口成れ、どうしようも海邊に彷徨て居るゝを、鹽土老翁が氣毒に思ひ海神之宮に送り奉るので有ます

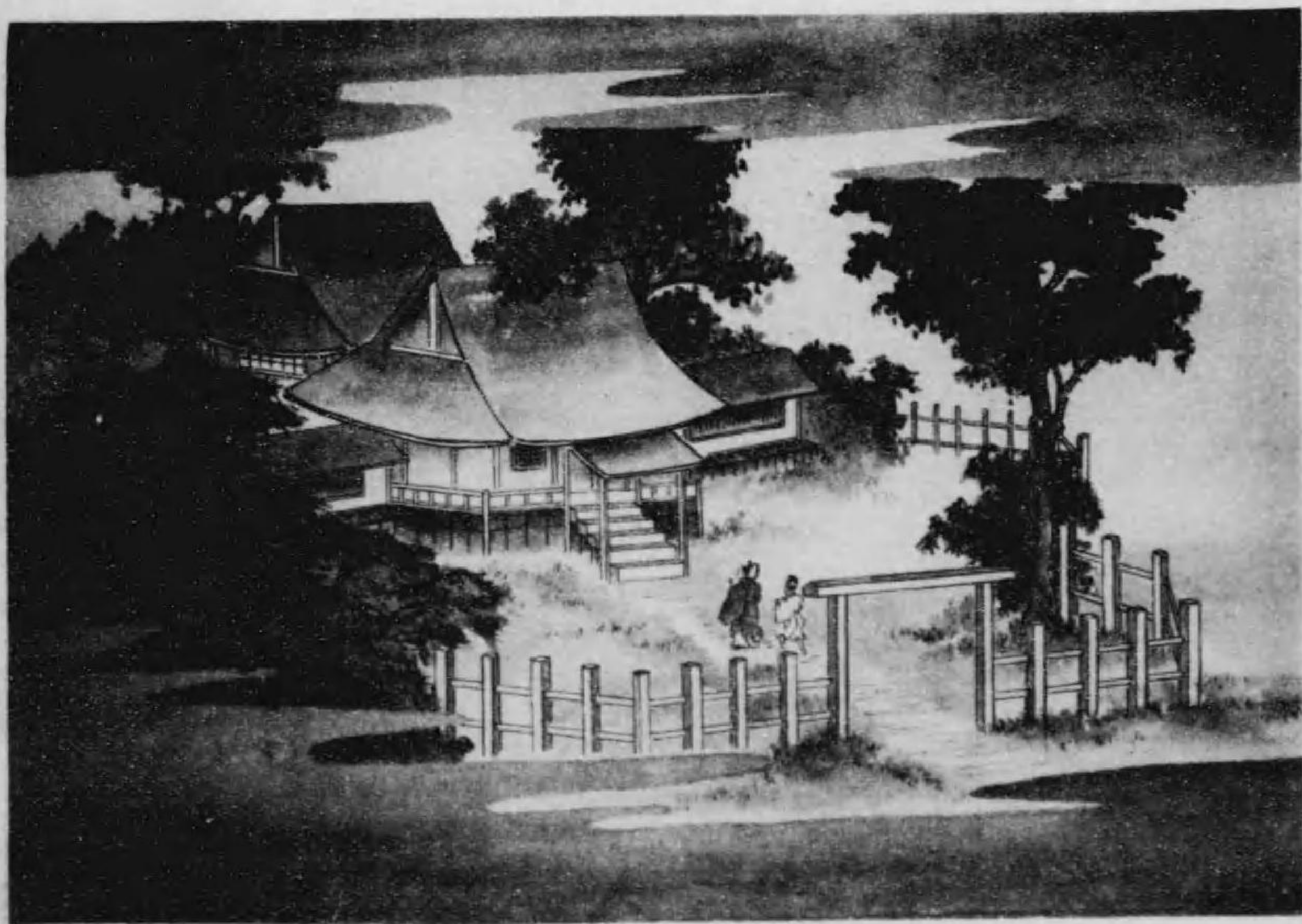


三九 海神之宮

そこで火々出見尊、海神之宮に、御出に成坐
た處、海神の女豊玉姫命が御逢申して、其事
を父神に申して御留め申し、釣釣の詮議を致
し坐と、大小の魚皆知らずと答へたるに、赤
目が此間咽喉に疾あるので、食物が喉を通ら
ぬと云て居たと云ひますので、赤目を調べま
すと、果して失へる鉤が有た、海神は赤目に
申し渡して、今より餌を吞な、又天孫の御供
物に上るを得ず、と云ふ事に成ました。

四〇 鰐魚奉送

火々出見尊三年間海神之宮に御出に成て御歸
途に際し、海神は鉤を奇麗に洗ひ清めて、差
上げ此鉤を兄尊に返さん時に大鉤、貧鉤、減
鉤、落魄鉤と諷らつてやられよ、又潮涸殊、
潮盈殊、兩箇を授けて、鰐魚を集め其一を撰
び、一日の中に尊を送奉つたが、其鰐魚の返
らんとせし時に、尊は其佩き給へる紐小刀を
解て、其頸に著て與へられた、其鰐鬼を勤持
神と云ふと有ます。



四一 鵜羽菅草
 海神の御女豊玉姫命参り坐て、火々出見尊に申し坐には、妾は既に産娘致し坐て、最早臨月に成坐た、あなたの御子を海中で生坐てはすみません故、参り坐したと、そこで海邊に産屋を立て、鵜羽を菅草として、其屋根を菅ますに未だ管合ぬ内に御誕生に成坐た、故其御子の名を彦波瀲武鸕鷀草菅不合尊と申されしました

四二 橿原之宮
 是は神武天皇の御出に成た、大和の橿原の宮で御座ります、神武天皇は鸕鷀草菅不合尊の第四の御子で、神倭磐余彦尊と申し、始め日向の高千穂の宮に御出に成坐た、夫より所々の凶賊を御征伐に成て、六年目に大和國に御出になり、橿原の宮にて、始て天皇の位に即されました、今の官幣大社橿原神宮は、其御跡で有ます

わか國の政體、法律、文學、宗教、人情、風俗、何事も今日の盛觀を呈する源泉たる、遠く神代に發して流れ來りたるものなることは、余等が今更云ふまでもありません、故に神代の事蹟を詳にするに云ふことは、今日あるを知る所以で有ますから、我國人たるもの、務めて之れを知らなければなりません、さりさて、これを知るの道もまた容易で有ません、然るに塚田皇典學正の考接に出たる神代圖畫を得た、是こそ神代の事蹟を容易に知るの好材料なれど、直ちに寫映し氏に毎圖の説明を請ひて、之れを帖に製し實費を以て廣く需に應ずること、なしたので有ます、この帖を一たび開かば、神代の有狀現在に見るが如く、大に發明せらるゝこと、余等の信ずる所で有ます

大正二年十月

青山茂
富田實

大正二年十一月廿五日印刷
全 年十一月三十日發行



著 者 塚 田 菅 彦

發行者 富 田 磯 吉

名古屋市東區門前町四丁目十七番地

發行者 青 山 三 郎

名古屋市東區門前町四丁目廿二番地

印刷所 浪 越 寫 眞 製 版 所

名古屋市東區南園町一丁目乙十番戶

名古屋市東區大須元公園內

發 行 元

青 山 寫 眞 館

337
146

終